



加藤 益弘 特任教授
Masuhiro Kato

研究分野： ゲトランスレーショナル・リサーチ・イニシアティブ (TR機構)
大学発の研究成果を実用化に結びつけるための支援機関

研究内容： アカデミアの研究成果を実用化に結びつけ医療イノベーションに貢献するシステムを構築している。企業や審査当局目線に立脚したアドバイス等による強力な研究支援体制、大学のシーズ研究テーマの包括的マッピングによる企業からのアクセスの大幅な改善による企業との連携強化が柱。

住友製薬にて創薬研究、国内・欧州臨床開発担当
ゼネカ社にて薬事本部長、研究開発副本部長を歴任
アストラゼネカ社にて研究開発本部長、代表取締役社長、同会長
現職

先生方の研究成果を医療革新へと繋ぎます

1. はじめに

日本医療開発研究機構が発足し日本の成長戦略の第三の矢の大きな柱の一つである医療イノベーションが大きく進もうとしている。一方、世界的に革新的新薬の創出は益々困難さを増しているため、世界の大手製薬企業でさえも創薬のオリジンアカデミアに求める動きが加速している。アカデミアも基礎的研究の追求は充分尊重しつつも、研究成果を社会還元しこれらの動きに対して積極的に貢献していく義務がある。

本学においても研究成果を医療イノベーションに移転するTRシステムを構築することは、アカデミアとしての責務を果たし、かつTR研究の果実を還元し更なる研究の発展に再投資するためにも非常に重要である。TR機構として今後は本学の生命科学および医療関連研究に従事する研究者のご協力を得て強力なシステムを育て上げる事が急務となっている。

2. TR機構のシステム【図-1 TR機構のワーキングモデル】

TR機構の活動には大きく分けて5つの柱がある。
第一は、Single Point of Contactとして機能する。企業の要望の研究者へ紹介、研究者の成果の企業へ紹介、さらには部局間の研究者同士の連携の後押しを行う。
第二は、Single Point of Contactに更に付加価値を付けるために必要な本学の研究内容を包括的に把握するリサーチマッピング機能の構築と活用
第三は、研究者にTRに関する多角的戦略的アドバイスの提供
第四は、本学研究者に不足している相補的研究手段やツールを提供すること
第五は、企業等の交渉はTR機構が代行し研究者への負担を軽減すること
ここでは、第二、第三を中心に説明する。

3. リサーチマッピングシステム【図-2 リサーチマッピング表示例】

TR機構では本学にて進められている研究内容を網羅的に把握し学内外の様々な要望に応えると共に、TRに有用と思われる研究を積極的にサポートするシステムを構築した。シーズ研究登録とそのデータを活用するリサーチマッピングシステムである。

4. 多角的TR戦略：Steering & Science Committee (SSC)【図-3 SSC構成員】

SSCは企業の研究開発や薬事・特許等戦略部門の専門家、PMDAの審査専門員経験者、医療関連専門弁理士、VC、ビジネスコンサルタントからなり、研究者にTR戦略を多面的に支援している。

5. まとめ

TR機構の目的は、本学の研究成果を可能な限り医療イノベーションに繋げアカデミアの目的の両輪（学術的研究とその応用による社会貢献）を揃える事にあります。それには、生命科学シンポジウムに参加していただいている先生方のご協力が不可欠であります。TR機構の意義をご理解頂きご協力を頂きますようお願い致します。

図1 TR機構のワーキングモデル

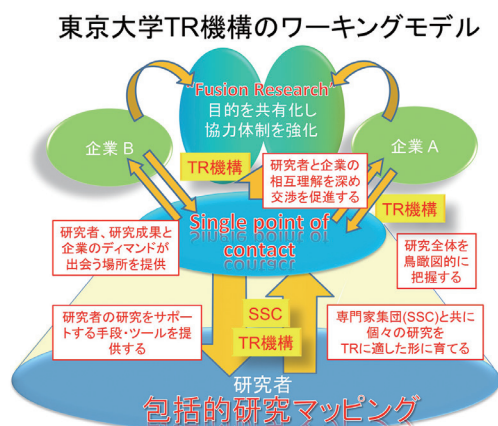


図2 リサーチマッピング表示例



図3 SSC構成員

